
謎解きはリボーンの後で・・・

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎解きはリボーンの後で・・・

【Nコード】

N3742Y

【作者名】

時雨

【あらすじ】

オリ主である高嶺 朱雀は目を覚ますと一つの部屋にいた。たかみねすびく

扉から出てきた執事、黒野から今までの事を説明され親の計らいによって並盛高校に行く羽目になる。

何かそこで？グローブやボンゴレリングに炎灯しちゃったり、原作とは一味違う技習得しちゃったり、んで何故か難事件に挑んじゃったり、様々な出来事が起こっちゃいます。

目を覚ますと・・・(前書き)

！ 初の二次創作なのでどうなるか分かりませんがどうぞご覧ください

目を覚ますと・・・

目を覚ますといつもの朝だった。

眩しい朝日が窓を突き抜け部屋に入ってくる。小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。

いつも通りの朝だった。だが一つだけ違うところがある。

「・・・どこだここ？」

俺、高嶺 たかみねささく 朱雀とはある部屋のベッドにいた。

しかし、その部屋はただの部屋ではない。貴族様が暮らしてそうなあの無駄に広い部屋だ。

カチャ・・・。

すると、部屋の扉が開いた。

「あつ。お気づきになられましたか」

そこには黒のダークスーツ姿の男がいた。

「後気分はどうですか？」

「あの。一つ聞いても良いですか？」

「はい。何でしょう？」

「あんた誰？」

すると男は、

「おっと、申し遅れました。私^{わたくし}ここで執事をやらせていただいております黒野という者です。以後お見知り置きを」

「執事？」

「はい。朱雀様の旦那様から雇われました」

「父さんから！」

俺は目を丸くしながら言った。

「は、はい。作用でございます。覚えてらっしゃいませんか？朱雀様。昨日の事を」

「昨日の事？」

よく思い返してみた。すると一つの答えにたどり着いた。

「あー。まさかかとは思いますが昨日、突然意識を失ったのって・・・」

「はい。旦那様が朱雀様の首に一撃を入れて、気を失わせたためでございます」

「ああ・・・。そう」

その時、俺は内心思った・・・。

『あんのクソ親父がああああああああ！!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!-!』と、心の中で叫んだ。

そんな事を気にせず黒野は、

「ところで朱雀様。入学式の準備は整っておりますか？」

「入学式？」

「はい。明日は並盛高校の入学式でございます」

「え？俺そんなとこ受けてないけど」

「これも旦那様の計らいでございます」

あの野郎おおおおおおおおお！……！！！！！！！！！！……！！！！！！！！！！
と、俺は心の声を必死に抑えながら、

「い、いや。まだだけど」

「作用でございますか。それではご用意いたしましょう」

黒野は手に持っていたリモコンを操作した。すると、壁からそれはそれはながいクローゼットが出てきた。

「えーと……これは？」

「こちらの中から一セット、制服を選んでいただきます」

「選ぶって……これ何種類あるんだよ……100はあるんじゃないか？」

「正確には112種類でございます」

「112！」

再び俺は目を丸くした。

「何でここまで作ったんだか・・・いつそ私服校の方が良かったんじゃないか？」

「それは同感でございます」

「しゃーない。とっとと選んじまうか！」

とは言ったものの、普通に一時間もかかってしまった。やはりここまで多いと時間はかかるわな・・・。
結局、俺が選んだのは上は黒のブレザー、下は白と黒のチェックのズボンだ。

「とてもお似合いですよ」

「そりゃどーも」

「では、次はカバンなのですが」

「まだ選ぶのか？」

「はい。これの他にも、靴、部屋、運動着、e t c...」

「あー分かった分かった。とにかくさっさと選んじまおう」

そして早速、バックを選び始めた。

バックは先ほどとは違い、三つに決められていたのですぐ決まった。俺は手下げ型のカバンを選んだ。

その後も色々ことは進み、すべてが終わったのはもう夕方頃だっ

た。

「やっと終わったー」

「お疲れさまです」

黒野はコーヒーを机の上に置いた。

「そういえば、ここから並盛高校は近いのか？」

「はい。歩いて15分の所でございます」

「チャリで10分といったところか・・・」

「自転車で行くおつもりですか？」

「当たり前だろそんな近いんならわざわざ車で行く必要無いだろう」

「いえ、そうゆう事ではなくて無いのでございます。自転車が」

「え！そうなのか・・・しょうがない。明日は歩きで行ってその後で買いに行くか」

そうしてかれこれ一時間が経ち、時刻は10時半。

「もう10時半か・・・そろそろ寝るか」

こうして俺は慌ただしい1日を終えた・・・。

目を覚ますと・・・(後書き)

いや〜何か見る限りほとんどオリジナルになってしまいました。

なんか・・・ねえ・・・(前書き)

第2話

いや、今回は前回よりも長くなってしまいました。頑張ってください。

あと少しグダグダです。

なんか・・・ねえ・・・

朝、俺はいつも通り目が覚めた。

ふとベッドの横を見ると荷物の入ったスーツケースがあった。おそらく黒野が準備したものだろう。まったく、本当に準備の良い奴だ。必要な物は全部揃っている。

そう思いながら俺は昨日選んだ制服を身にまとい朝食を取り、出掛けようとした。その時、

「お待ちくださいませ朱雀様」

黒野が何かを持ってきた。

「どうした黒野？」

「これをお渡しするのを忘れておりました」

すると持っていた箱を開けた。そこには二つのリングと懐中時計があった。

「これは？」

「こちらは並盛高校から贈られてきたものでございます。なにも個人認識のようなものだとのことですよ」

ふーん。並盛高校って随分と変わってんだな。

「分かった。ありがとう」

俺はリングをチェーンに通し首にかけ、懐中時計はポケットに入れた。

「それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃいませ朱雀様」

）．．．）．．．）．．．）

今、俺は一年生の教室にいる。だが．．．これは．．．ねえ．．．。

『後ろからクラス全員の視線を感じるんだが．．．』

分かりやすく言ってしまうえば、I の第1話でゆう一的気分である。

ただ一つ違うとすれば、クラス全員が女子ではないことだ。ちゃんと男子もいる。

だが．．．その男子でさえも俺の事を凝視している。

怖いよ．．．怖いよパト ッシユ．．．。

「えー、皆さんこんにちは。それでは、我が校の説明をいたします。本校は入学式でも説明したように、自警団を育成するために様々な分野に取り組んでおります。」

ああ。そういえばそんな説明してたな。校長から。確か名前は沢田．．．綱吉だったかな。帰ったら黒野に聞いてみるか。こうしてまあ説明は終わったんだが．．．未だに視線を感じる。すると一人の男子が近づいてきた。

「よっ！俺、山本 啓信^{けいしん}て言うんだ。よろしくな！」

その男子は他とは違い、どこか抜けているいわば天然な奴である。

「あ、ああ。よろしく」

俺は山本と握手をしたついでに、

「なあ。何で俺みんなに見られてるんだ？」

「何でって、そりゃあお前が大空の守護者だからだよ」

「大空の守護者？」

「そつ。大空の守護者はこの七部属性の中でも数少ない人間にしかないからなあ。だからお前新入生の言葉言わされたんだよ。ちなみに俺は雨の守護者だ」

ああ。そういえばあつたな・・・あん時は驚いたよだっていきなり新入生の言葉の書かれた紙を渡されんだもん。

「なあ。その七部属性には何があるんだ？」

「ああ。大空の七部属性には嵐、雨、晴、雲、雷、霧、そして大空の七つがある」

「へー」

「そしてそれぞれを色で表すと、嵐はレッド、雨はブルー、晴はイエロー、雲はヴァイオレット、雷はグリーン、霧はインディゴと言うことになる。みんなのリングを見てみる」

俺はクラスのみんなの指に目をやった。そこには、様々な色の付いたリングがはめられていた。
そこで気づいたのは、

「みんなほとんどデザインが違うんだな」

「まあな。リングのデザインによってそいつがどこに所属するかがほとんど分かる」

そこで山本は、

「そつだ。朱雀のリングも見せてくれよ」

「え？ああ。いいけど」

俺は首に下げていたリングを山本に手渡した。

「おっ！やっぱり朱雀もアニマルリング持ってるのか」

「アニマルリング？」

「ああ。アニマルリングって言うのはそれに炎を灯せば実体化して一緒に戦ってくれるとても便利なやつだ。ちなみに朱雀のは・・・これは、鳥だな」

「ふーん。で、もう一つは？」

「ああ。これは・・・」
すると山本の見目が変わった。

「これは・・・ボンゴレリングだ・・・」

「ボンゴレ・・・リング?」

「ああ。この学校の中では三つのAランクオーバーのリングを持つファミリーがある。シモンファミリー、ミルフィオーレファミリー、そして、ボンゴレファミリー」

「そのうちのボンゴレファミリーのリングがこれって訳か・・・」

「ああ。でもまあ良かったよ。お前もボンゴレで」

「・・・え?」

俺は頭の中に?のマークが浮かんだ。

「まさかかとは思うが・・・山本、お前・・・」

「ああ。俺もAランクオーバーでボンゴレファミリーだ」

やっぱりか・・・。ん?てゆうことは・・・。

「なあ。俺達の他にも後5人いるってことか?ボンゴレのAランクオーバーが」

「まあそうゆうことになるな」

いったい誰だ?

「まあ一人はめぼしはついてるんだがな」

「え?誰?」

「俺の友人で嵐のAランクオーバーがいるんだ」

「そっか・・・んじゃあ明日会ってみるか」

「ああ。んじゃあ今日はこれで」

「おう。また明日」

そして今日は帰宅した。

～～～帰宅後、俺は黒野に校長先生について聞いてみた。

「なあ。黒野」

「何でございましょう?」

「お前、うちの校長先生について何か知ってるか?」

「校長先生と言いますと?名前は何?」

「確か沢田 綱吉だったかな」

すると黒野の手が止まった。

「ん?どうかしたか?」

「朱雀様、それは確かでございますか?」

「あ、ああ。そのはずだけど・・・誰なんだ?」

「あの方はボンゴレX^{デーチモ}。ボンゴレファミリー十代目でございます」

「え．．．ウソだろ．．．」

「もう帰っていらしたのか．．．」

「なあ。何でお前校長先生の事知ってるんだ？」

「私は．．．」

その後、黒野の言ったことは、

「私はボンゴレ十代目の守護者だからでございます」

「なん．．．だって．．．」

「守護者といっても正確には少し違いますが．．．」

「どうゆうことだ？」

「私の属性は確かに大空の七部属性なのですが、私は他の部隊に所属していました」

「他の部隊？」

「はい。私が所属しているのは．．．」

その後、俺は黒野の言ったことに耳を疑った。

「私が所属しているのは．．．チエデフCEDEFでございます」

「CEDEFってボンゴレとは独立した諜報組織でもあり門外顧問でもある組織だよな」

「作用でございます。良くございまして」

「まあ友人から少し聞いたんだ」

「もしや、山本様では？」

「良く知ってんな」

「はい。彼はボンゴレ十代目、雨の守護者山本 武様の息子にあたります」

「マジかよ……」

その後、俺は黒野の話聞いた。話によれば、残りの守護者はあの学園にいるらしいのだが、それが誰かとゆうまでは知らないのとだ。

まあその事に関してはいいや。明日からはちゃんと自転車で行けるから今日よりはゆっくりと行けるからぐっすり寝るとしよう。こつして俺は眠りについた。

~~~~~その頃、学校では、

「集まり始めたな……」

「ああ……」

「ボンゴレとシモンのような……」

校長室には二人の男がいた。

「オレ達の意志を継ぐ真の後継者が・・・」

その校長室には柔らかい月明かりが差し込んでいた・・・。

なんか・・・ねえ・・・(後書き)

まさかの黒野がCEDDEFとゆづオチ・・・。

次回も頑張ります！

( )

ルームメイトはお嬢様？（前書き）

第3話

やっとヒロインの登場です。

ルームメイトはお嬢様？

翌日、俺は自転車で学校に行き、山本にある人物を紹介された。そう。昨日言っていた嵐のAランクオーバーの友人である。だが……。

「こいつが俺の友人、佐久間

さくましようた  
翔太だ」

「誰が友人だ、ダアホ！」

その佐久間 翔太とゆう人物は見る限り少し不良っぽい感じの人物なのだが、どうも不良のように見えない。

え？どうゆう意味だつて？ん〜・・・分かりやすく言えば、なんとなくか見た目は怖いけど心は優しいってゆうあれだよ。ほらよくいるじゃん。見た目は不良だけど見かけによらず横断歩道でおばあちゃんを助けてたりしている人。あんな感じ。

「で、こいつが・・・」

「ああ。大空のAランクオーバーの高嶺 朱雀だ」

「ふーん・・・」

すると佐久間は俺の顔をまじまじと見た。  
すると佐久間は、

「やっぱお前、綱吉さんに似てるわ」

「え？綱吉さんに？」

「ああ」

佐久間はあっさりと答えた。

「どこが？」

「まあ、なんとゆうかわかんねえけど、とにかく似てる」

「は、はあ・・・」

こうして新たな仲間が増えた。

くくくくくくくくくくその日のHR・・・。

寮の部屋割りが発表された。

「えーと、俺は027号室か・・・」

部屋割りの横に寮への地図があるのだが、迷う所ではなかった。なぜなら・・・。

『あそこって学生寮だったのか』

そう、そこは俺と黒野がいるあの屋敷だったのだ。

『なるほど。どつりで無駄に広いわけだ・・・』

その後、俺は迷う事なく寮（屋敷）に着いた。入ったところに山本と翔太がいた。

「お前らも寮生活なのか？」

「ああ。それで俺と翔太は同じ310号室になったんだ」





娘でございます」

へー。まあ、服装からしていかにもお嬢様って感じはするけどな。

「だから私の執事になりなさい！」

「ですからそれは……」

「かしこまりました」

「え？」

「私わたくしがあなたの執事となりましょう。お嬢様」

「朱雀様！」

「……あなたに出来るの？」

夏希が疑いの目で見てきた。

「ご安心ください。私、人のお世話は得意中の得意ですから」

「そ、そう。ならあなたに任せるわ。えーっと……」

「高嶺 朱雀ともうします。以後お見知りおきを」

こうして俺と夏希お嬢様の生活が始まった……。

ルームメイトはお嬢様？（後書き）

いや〜。今回は朱雀が執事になるとゆうオチ……。次回も頑張ります！

え〜っと・・・どちら様で・・・？（前書き）

#### 第4話

今回はリボンに出てくる“あの人”が登場します！

えっつと……どちら様で……？

翌朝、夏希は目が覚めるとそこにはエプロン姿の朱雀がいた。

「おはようございますお嬢様。昨日は良く眠れましたか？」

「ええ。おかげさまで……。ところで朱雀」

「はい。何でしょう？」

「あなた何してるの？」

「見ての通り朝食を作っているのです」

朱雀は平然と言った。

「今ちょうど出来上がりました」

テーブルに出されたのはトースト、スクランブルエッグ、サラダ、  
コーヒーだった。

「そう、ではいただくわ」

そして、今日も1日が始まった……。

く……く……く……く……俺は一足早く準備が出来たのでお嬢様を待  
つことにした。

「じゅめんね待たせて」

「いえ、ではまいりますよう」

俺は自転車の後ろにお嬢様を乗せ、学校に向かった。その途中、

「ねえ朱雀、今日の朝食とてもおいしかったわ」

「お気に召していただいて良かったです」

「あなたどこでならったの？」

「フッフ・・・それは秘密ですよ」

「えー。教えてよ」

こんな感じで歩いていると目の前に一人の男が現れた。

「おい、お前ら！」

「いいから、教えてよ」

「では、今度簡単なものを教えましょう」

「やった！」

二人はその男を素通りしていった。

「だから、ちょっと待てよ！」

男は少しキレ気味で二人を呼び止めた。

そして、俺は振り返り、

「何ですか？とゆうか・・・どちら様ですか？」

「俺は並盛高校2年剣道部主将、持田だ！」

そこまでは聞いてねーよと言いたい気持ちを抑え再び持田先輩の話  
を聞いた。

「高嶺 朱雀だったな。お前に決闘を申し込む！」  
「は、はあ」

「放課後、剣道場にこい！逃げるんじゃないぞ！」

と、言つて持田先輩は去つていった。  
はあー。どうしよう。しゃあない、行くか……。

「……」放課後、俺は剣道場に行った。だが何か様子  
がおかしい……。なぜならそこには剣道部員だけでなく一般生  
徒もいるからだ。

「なあ山本。持田先輩つてそんなに強いのか？」

「まあ去年、市大会で優勝したくらいだからな。」

「ふーん……」

話していると、持田先輩が現れた。その姿は剣道の胴着と片手に竹  
刀とゆう格好だった。

「待たせたな」

「どうやら決闘の内容は剣道勝負のようですね」

「ああ。一本を取った方が勝ちとなる。そして勝った方は賞品とし  
て、池沢 夏希を手に入れる事が出来る！」



「だな」

すると、持田先輩の面が真っ二つに割れた。

「な！」

「一本・・・取らせていただきました」

「しよ、勝者、高嶺 朱雀！」

すると周りから一気に歓声が沸き起こった。

「ふう・・・終わったか・・・」

俺は竹刀を軽く振り下ろし、剣道場をあとにした・・・。

~~~~~  
時間は過ぎて今は夕食の時間。夏希は朱雀の作った料理を食べていた。

「そついえば朱雀」

「何でしょう？」

「剣道場の時思ったんだけど、あなた剣道したことあったの？」

「いいえお嬢様。一度もありません」

「ウソ！じゃあ何であんな動きが出来るの？」

「分かりませんが身体が勝手に・・・」

「へー。じゃあ『お嬢様を物扱いするのはただじゃおきませんよ』は?」

俺はあーと言い、

「失礼ながらお嬢様、我々執事の指名はなんだと思いますか?」

「え?それはこんな風に食事を作ったり掃除をしたり」

「それもちろん大事なことでございます。しかし最も大切なのは主であるお嬢様を守ることでございます」

「え?」

「お嬢様はこれから生涯誰かに支えられて生きていくとゆうことをお忘れ無きように」

夏希はその言葉の後、窓から見える月を眺めた。

え〜っと・・・どちら様で・・・？（後書き）

持田先輩・・・、ご愁傷様です・・・。

次回は謎解きします！

殺しのワインはいかがですか？（1）（前書き）

第5話

今回は投稿が空いてしまいました。

そして今回は自己最長のページ数です」「。」「

皆さん、頑張って読んでください・・・」

殺しのワインはいかがですか？（1）

翌日、俺はクラスで話題になっていた。

そりゃそうだ。市大会の優勝者を一撃でしとめたんだもん。

「ねえねえ、朱雀君って剣道やってたの？」

「私も教えてほしいなあ」

こんな感じですつと質問攻めにあっている。そんなところに、

「相変わらず人気だな」

「山本。俺の顔が嬉しいように見えるか？」

「いや、どっちかつつと、疲れてるように見える」

「あたりめーだ！ここまで質問攻めにあって平気な奴を俺は見て見てーよ！」

「いるぜ、一人」

「佐久間だろ」

俺は分かっていた。佐久間はクラスの中でも人気者だ。

「アイツはすごいよ。勉強もスポーツも何もかもが出来る」

「ついでにピアノ、料理もお手のものだ」

「まあ、唯一苦手なのは、女子だけだな」

そんな感じで話していると、先生が入ってきた。ちなみに一時間目は数学だ。

「ほーら席に着けー。つっても今日は自習なんだけどな」

クラスからは喜びの声があがった。確かに、自習つっても先生から課題を出されたのは一度もないからな。

「それじゃあ、席に戻るわ」

「ああ」

そして、一日が始まった……。

〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃・〃 授業が終わり、今は帰り道。お嬢様と一緒に帰っていると、

「きゃあああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!」

隣の屋敷から悲鳴が聞こえた。

「なんだ!」

俺はすぐに悲鳴の聞こえた屋敷の二階に向かった。

「どうしました!何があっただんですか?」

「あっ……ああ……」

その女性は目の前を指差した。そこには、

「な！・・・」

一人の男が椅子に座って死んでいた。机の上にはワインのボトルと小さな小瓶、そして床にはワインがこぼれたグラスがあった。

「早く警察と救急車を！」

「は、はい！」

お嬢様がそう叫ぶと女性はすぐに警察を呼んだ。

「朱雀、あなたはすぐに帰りなさい！」

「お嬢様？」

「私がお嬢様つてばれちゃいけない理由があるの！早く！」

「か、かしこまりました」

俺はすぐに屋敷から出た。それから10分後、すぐに警察が到着した。

「・・・」
「しかし驚きました。お嬢様が刑事だったなんて」

「まあね・・・ってあなた何で知ってるの！」

おっと、口を滑らせてしまった。今度から気をつけないと。

「実を言つと今日、お嬢様を見守らせていただきました」

「そんなことしたら見つかるわよ！」

「申し訳ありません。今度から気をつけます」

夏希はため息をついた。

「はあー。やっぱり自殺なのかなー」

「と、言いますと」

「あなたも見たかもしれないけど、あの小さな小瓶は青酸カリだったわ。おそらく自殺するために使ったのかもね。朱雀、あなた何かわかる？」

俺は少し黙り込んで、

「い、いえ私にはさっぱり・・・」

『そうよね。刑事が一般人に質問してもね・・・』

夏希がそう思っていると、

「しかし、お嬢様は今日何人かから証言を聞いているはずですよ。その内容を詳しく話していただければ私わたくしなりの考えが述べられるはずですよ」

すると夏希は少し考えた後、

「分かったわ。話してあげる」

「ありがたき幸せ」

「……まず死亡した男は、若林 辰夫^{たつお}62歳。第一発見者はあの家の家政婦よ。なかなか起きないから部屋に呼びにいったら寝室であの状態だったわけ。」

で、ここで私の上司、風祭警部が、

「見ろ、池沢君。若林 辰夫は寝る前にワインを飲んでいたので、誰でもわかるようなことを言ったんだけど、

「あのお嬢様、この風祭警部とゆう人はアホでらっしゃいますか？」

「まあ、そう考えて良いわ。」

で、その後若林家の人間が集められたんだけど、そこで辰夫の弟、若林 輝男^{てるお}は、

「刑事さん、ひょっとして兄は自殺したのではありませんか？」

「いえ、まだ自殺と決まったわけではありません」

で、さらに長男の若林 圭一^{けいいち}は、

「自殺じゃないというのなら、刑事さんはこれは殺人だというんですか」

「べつに殺人であるとはいっておりません。まだ殺人の可能性も否定できないとだけだして」

そして今度は圭一の妻である春絵が、

「まあ、刑事さん、なんて物騒なことをいうんです。この家にお義父を憎むものなど一人もいません」

次に次男の若林 修二は続けて、

「刑事さん、親父が死んだのは自殺だよ。みんな知っていることだ。そうだよ」

「と、いいますと」

「昨日、家族会議で親父は家政婦である藤代 雅美まゆみとの再婚を考えていたのです」

「それで、皆さんの反応は」

「もちろん、反対ですよ。父は騙されているんです、あの女に。きっと財産目当てに違いありません」

すると輝男は胸ポケットからマッチを取り出し、パイプに火を付けた。

「それで結婚を反対された辰夫さんの様子は」

「そりゃあ、すごい落胆した顔で部屋を出て行きましたよ」

「しかし、僕らは父の為に善かれと思って言ったんですから」

今度は圭一が煙草を一本くわえて、百円ライターで火を点けようとしたんだけど、どうやらガス欠みたいで、壁際にいた修二に、

「おい、お前ジッポー持ってたよな。貸してくれ」

やれやれと修二は言いながら、ポケットからジッポーのオイルライターを取り出し、圭一の煙草に火を点けてやると、ついでに自分の煙草にも火を点けた。

「どうやら若林家は喫煙率が高い家族のようですね」

「ええ。私もたまらず窓を全開にしたわ」

そして次の瞬間、扉から家政婦の藤代 雅美が入ってきて、

「旦那様は自殺などではありません！旦那様は何者かに殺されたのです！」

すると春絵は、

「あなた！でしゃばるのも、いい加減にきなさい！お義父様は自殺なさったのよ。それもあなたのせいだね！」

すると春絵は続けて、

「ええ。判ったわ。あなたはお義父様の遺産狙いでこの家に来て遺産をかすめ取るうとしているのでしょう！」

「いえ！私はそんな・・・」

「黙りなさい！この恩知らずの雌豚め！」

すると、風祭警部は時計を見て、

「おっと、もうこんな時間だ」

時計を見ると、時刻は1時45分、昼ドラはおしまいだと言いたいのだろう。もう少し見たかったが仕方がない。

「で、朱雀。あなたこの時どこにいたの？」

「はい。辰夫氏の部屋の棚においてあった見事な蔵書みじしゆに目を奪われておりました」

「ちょっと！ちゃんと仕事しなさい！」

「なんと、私が愛読してやまない『ハーポツー』の最新版があったのでございます」

「無視すんな！てゆうか人んちのものを勝手に取ってくるな！」

「もちろん返しますとも。読み終えたらですがってあっ！」

朱雀の手から本が取り上げられ、

「今すぐ返す！」

「・・・はい」

その後も捜査が続いた。で、場所は変わり辰夫さんが一昨日行ったスナックに聞きに行っただけ、

「ええ。来ましたよ」

「どんな様子でした？」

「うーん・・・なんか陽気な感じだったわ」

「はあ・・・」

「あっ！でもカラオケで十八番を歌おうとしたら急に泣き出して」

「急に・・・ですか・・・」

その後、私達はスナックの手伝いをしたの。

「あのー何を作ってるんですか？」

「ん？ああ。最近、経費削減の為にからしをチューブから練りからしに変えたのよ。でも大変なのよね」

「は、はあ・・・」

その後、向かいに住んでいる少年の話によると、

「君が雄太君だね。話があると聞いてきたんだけど」

「うん。あのね、おじいちゃん先生の部屋から明かりが見えたんだ」

「それは何時くらいのことかな？」

「真夜中だよ。午前2時ごろ」

少年は指を2本立てて答えた。

「あ！」

「このように、何らかのものが触れたときに必ず何らかの痕跡は残るはずなのです。しかし、それがなかった。つまり、考えられる事は1つ。ボトルの中に毒を入れたのでございます」

「どつゆつこと？」

「こちらをご覧ください」

俺は黒野に1本のワインボトルを取り出させた。

「これは？」

「イーヨー ドーの1995円ものでございます」

「ホントだ。値札が貼ってある」

夏希はボトルをジーツと見た。

「ねえ、朱雀。これ、どっから見ても毒を入れるところなんてどこにも無いわよ」

俺は「あー……」と言い、その後黒野と顔を見合わせ、

「あの……失礼ながらお嬢様」

俺は顔をズイツと近づけると、

「お嬢様の目は節穴でございますか？」

「……ハア？」

夏希の持っていたコップに亀裂が入った。

「あの……お怒りのようでしたらお詫びを……」

「謝つてすむならこんな態度しないわよ！」

夏希は朱雀と黒野に怒鳴りつけた。

「それじゃあ聞くけど、あなたこの事件の真相がわかると言つもの？」

「いきなり話が変わりましたね……。まあ、この事件はそれほど難しいものではございませんが、しかし……」

「何よ」

「今ここで犯人を言ってもお嬢様にはご理解いただけないかと……」

「じんの……！」

夏希は一瞬、拳を振り上げそうになったが必死にその手を降ろし、

「朱雀、私にも分かるように説明して」

その顔はいかにも屈辱に溢れていた。

「……かしこまりました。お嬢様」

すると料理を出しながら、

「しかし、まだ夕食の続きでございます」

目の前に料理を出すと、

「謎解きはディナーの後にいたしましょう」

殺しのワインはいかがですか？ (1) (後書き)

最後まで読んでくれた方お疲れ様でした。

次も頑張ります。(^ - ^) 。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742y/>

謎解きはリボーンの後で・・・

2011年11月26日00時57分発行